

韓国の代案教育の歩みと今後の課題

—日本の代案教育との交流を通して—

橋 元 慶 男

The present situation and a problem of the Korean alternative education

Keio HASHIMOTO

Abstract

The Korean rapid modernization made many problems for school education. Particularly, the problem of much school refusal children increased.

Alternative schooling became popular in Japan and Korea in the 1980's and 90's. However, the Ministries of Education in each country have responded differently.

In Korea there has been apparent government support for the introduction and implementation of alternative schooling such as HAJA and Saranbang. As Korean educational reform, alternative education was born. I looked back on alternative plan education of Korean ten years and considered it I studied it based on the investigation of the Korean Education Department as follows.

Key words

Alternative Education, Magnet School, Haja Center, free school, Korean Education

I. はじめに

韓国の急速な近代化は、伝統的な社会化、共同体を中心とし儒教をベースにした教育システムの崩壊をもたらし、1970年代からの人権を無視した経済中心の近代化は、村落共同体での儒教の教えや礼儀を理想とする伝統的な社会化の崩壊のみならず、韓国社会の基本体制を揺るがす社会問題を呈するようになった。1990年代から、民主化も経済的発展も安定を取り戻す中、今まで放置されてきた様々な問題、特に「不登校」を含む教育問題が露呈されてきた。従来の教育方針や伝統的な社会的価値観では対応しきれない問題を露呈するばかりである。

本論では以上のような韓国社会の独自の歴史、伝統的な教育文化、社会体制を踏まえて、脱学校の青少年の選択する「韓国の代案教育」現状や対策及び今後の課題について、客観的なデータやアンケート資料に基づき、代案教育を通じて、韓国の近代教育のあり方を考察するのが目的である。

同時に日本と交流が深い韓国との教育問題の類似性や相違性を比較して、日韓の共通の教育問題として、共生の道を導くことを検討する。

II. 韓国の代案教育の現状

韓国では Alternative 教育に対して、代案教育という用語が使われ、Alternative Education, Alternative School などの地域により様々な意味合いがある。60年代アメリカでは free school に代わって Alternative が勃興し、既存の学校に適應しない子ども達を対象にして、多様な教育的必要に応えようとし、形態の多様化と共に拡大した。

既存の学校教育に対する問題意識から出発している点は、韓国と共通している。

10年前、既存の学校から逃亡する青少年のためのガンジー代案学校への関心は徐々に高まり、多様な学校と学習空間が持続的に出来てきた。

韓国の教育界が急激な近代化の社会變動に、代案教育の教育哲学や学習方式が時代の変化に順応して、発展的な需要で満たされることが予測されそうである。

しかし、現実には代案学校の在生人数は5,000人程度に過ぎず、全体学生の人口比率から見て、約0.2%である。この数字は5万人程度と推定される脱学校の10%に過ぎない^①。

代案教育を探し求める親子は増加する中で、制度の不整備から路頭に迷う彼らに代案教育を提供する国家の義務が果たされず、韓国の教育界の保守的な実態が伺える。

代案教育に教育界は防衛的な傾向が見られるが、代案教育は公教育と対立する関係ではなく、「下からの教育改革」運動として、国家という公的な組織が積極的に支援しなければならない領域である。代案学校は後期近代化の「公共的な学校」として、近代化の適切な時点から、増加が期待される学校の形態である。

1) 代案学校の3つの類型^②

①「学校の枠」を揃えた代案学校

学生数が100人も越え、既存の学校形態に近いが競争と受験中心ではなく、相生と協力を重視する。財政的な援助は親や市民社会の支援のため、実態は安定した家庭の子供が多く、多数の子供が大学進学を選択する。

「ガンジー学校や以友（イーユ）学校などに見られる形態」である。

②「学校の枠」を揃えてない学習空間

この空間は「後期近代的」危機社会が生み出した新しい形態である。規格化・大型化された既存の学校体系から外され、居場所をなくした子供たちの、一般の家を利用して運営する「Group home」形態の小さな複合空間の居場所である。

ここで、基本的な生活をして、自らの力で自律するための勉強をしている。

家庭のような温かい雰囲気の中で、皆が共に生きていくために必要な知識を身に付け、訓練を受ける居場所である。

③家庭の事情に関係なく、既存の学校体系に適應できない子どものための空間（居場所）である。様々な理由で既存の学校には居られなくなった子供を対象としている。

多様で不適応な子どもをサポートする学校であり、基本的に小規模で、「実験的形態」の学習が中心である。費用面では個々に合わせた教育は意外と都市型代案学校では他の社会的な支援を活用しながら、既存の学校の半分程度の250w（ウォン）を目標にした教育を行っている。

3つの内容的には相違がみられながら、類似した進化の過程を歩んでいる。初期の代案教育は

「抑圧的な学校からの脱出」として、標語は自由と選択、また個性と素質の発言であった。これまでの代案教育歴史と急激な社会解体の中で、「解体社会を再構成」する学習の場でもあり、従来の知識偏重の教育から体験学習や共同学習を通して、自己問題解決能力を目指す複合的な空間になっている。

多少、早く近代化の過程を経験した日本の最も深刻な教育問題として、「家庭内引きこもり」^[註1]の問題がある。個性と独創性の近代の終わりのイデオロギーに振り回されない温かな眼差しのあふれる家族的な共同体としてのお互い支え合える学びの場を目指す取り組みが推進されようとしている。

日本の学校が文部科学省のスクールカウンセラーの派遣事業として、公教育が「care：ケア」の機能に力点が置かれ始めている中で、韓国の代案教育が果たす「ケアの空間化」を学ぶ必要性を痛切に感じる。代案教育の類型別に多様なモデルが開発され、支援財団や企業、親の認識、空間の確保や教師の充員などの新しい取り組みが見られるが、やはり、政府の代案教育への制度的な支援措置が必要に思われる。これまでの代案教育が行ってきた多様な実験的な取り組みを韓国の後期近代的な生涯学習時代に備えて移行することである。超高速な経済成長による突発的な近代化による破壊された共同体の再生に向けて後期近代の街づくり事業に投与する多くの予算を、これまでの代案学校の解体された共同体を再構成する重要な役割に目を向け、政府の支援が必要である。

私教育の市場の継続的な肥大化の抑制は困難であり、今後は学校の選択の幅を広める代案教育が多く出てくることである。

Ⅲ. 代案教育の歴史⁽¹⁾

1980年代末の全教組運動から始まった教育改革は親と学生、市民団体の参加に刺激され、1990年代半ば以降教育関係当局も、諸外国の多様な改革事例を探索しはじめた。

教育改革の声の頂点にあるのが「代案教育」であると考えられる。代案教育の萌芽は韓国の近代的な既存の学校教育への社会への重要な問いかけでもある。

代案教育の歴史を3つの経緯から概観すると次の通りになる⁽¹⁾。

1) 萌芽期①

西洋では近代的な公教育制度の誕生から、問題点を看破し、1921年にイギリスでは Summer hill の創設、1919年にドイツのバンドルフ学校の創設から、今は全世界に700余ヶ所誕生した。Summer hill をモデルとして誕生したアメリカのクロンララ及びサド・ペリー、日本では「きのくに子ども村学園」、タイの moo Baan Dek 等がある。

1970年以降、公教育への社会批判的な理論書も次々と出された。

宋ジュンゼ（2007年6月）は歴史的な評価できる教育現場の献身的な努力に拘わらず、結局、日本の軍国主義教育の残りと欧米式の理論と体制の単純な導入、また軍事文化的な近代化の教育の混合物と評して、その特徴は権威主義、非人間的、画一主義的なものであると批判している。

しかし、1970～1980年代代案教育の萌芽的な取り組みとして、パブロ・フレイクの『ベタゴジー』は批判教育学の重要な理論的・実践的な指針としての「民衆教育運動」がある。

低所得層の共働き家庭の児童を対象とした勉強部屋「ゴンブ・バン」運動は、脱学校青少年の

ための居場所あるいは「都市型代案教育」は地域の勉強部屋として、小学校の放課後の代案学校としてグレードアップした。

中でも、韓国の教育改革の歴史、代案教育の歴史で、1950年代に創設されたプルス農業高等技術学校は「偉大な平民を育てる」を目標として、多くの示唆に富んだ実質的なアイデアを開発、提供を実践し続けている。

2) 萌芽期②

1980年代半ばに子ども達に生態的な生活を体験させるための様々なキャンプが、放課後の週末学校、学校の休みの季節学校等が主な形式であった。

1984年に結成された「もう一つの文化」運動は差別をなくし、子どもの自治能力に重きを置いたキャンプ式のプログラム全国に急速広がり、「ヤンチャ学校」「ミンドレオ（タンポポ）」等10数ヶ所の実験的な取り組みが代案学校の過渡期的な実験で、自然に全日制の代案学校に変貌として実を結んだ。

1980年代半ばから始まった全教組運動は盲目的な受験中心の教育がもつ病根、教育課程の問題点、教育の不平等の問題点、学校財政の不透明などを鋭くし、学校教育が持つ矛盾に対する問題意識を土台にし、代案教育が生まれている。

1990年代初を代案教育の萌芽期としての取り組みは1990年初に生まれ、その以降、急速に広がっていく共同育児運動がある。

共同育児運動は、とりわけ小学校の代案学校の前身となる重要な動きであった。

1994年に育児問題で悩んでいた親の20家庭が共同育児に心を集め設立し、それが韓国の第1号の共同育児組合である。親が自ら教育協同組合をつくり、一緒に出資して共同運営する画期的な実験であった。

2001年、共同育児の経験と人的基盤を土台にして富川市に「山子ども学校」が誕生するが、これが韓国最初の小学校の代案学校である。このような経験を生かし、小・中・高の統合課程の代案学校である「ソンミ山学校」の設立がある。

殊に代案教育の萌芽期として注目しなければならないことには教育関連の研究者の動きである。かつては公教育の問題点を指摘し、代案教育的な談論を提起する研究者は多くはなかった。しかし、1995年頃から宋ジュンネらの何人かの教育研究者が「ソウル平和教育センター」を中心に代案教育運動を行う。

3) 代案学校の設立期

これまで韓国の代案教育の萌芽期から、代案教育という大きな流れをつくったことに重要な位置を占めているのは「代案学校」の設立である。約10年前に新しい教育に対する渴望でうごめく韓国の多くの欲望を水面の上に引っ張り上げ、「代案教育」に実態を付与したのはすなわち、「代案学校」を設立した人々の力である。

1995年2月、太田の儒城で集まった「新しい学校をつくる人々の集い」がその最初の動きであった。代案教育の運動家が以降、数多い代案学校を生み、さらに全国単位の代案教育の連携体である「代案教育連帯」や代案教育分野の媒体である隔月刊『ミンドォレ』のような雑誌を誕生させた。韓国の代案教育の歴史のなかでもっとも重要な事件が何かを問われた場合、1997年に設立されたガンジー青少年学校の開校だといえる。

ガンジー青少年学校は韓国初の全日制代案学校である。

4) 特性化学校の誕生⁽²⁾

韓国初の全日制的代案学校であるガンジー青少年学校が設立してから間もない内に、教育関係当局はこれをきっかけに教育改革をはじめた。それが特性化学校の政策である。

また、この特性化学校政策は教育関係当局の代案教育に関連する政策のなかでもっとも早い内に実効を得た政策である。特性化学校政策の根っこは、文民政府の画期的な教育改革政策である1995年5・31教育改革法案までさかのぼる。この改革案には学生の多様な個性を尊重するため、小中高等教育の運営方案の一つとして高校設立準則主義を導入、多様な類型の学校設立を可能にするという計画が含まれている。ところが、あいにく「多様な」類型の学校に対する計画は当時の教育界の悩みであった急増する中途脱落の学生の問題のため、1996年10月に発表された「中途脱落の予防の総合対策」と連動する。そもそも、中途脱落の問題の解決案の一つとして公立代案学校の設立が論議されたが、民間で代案学校を一つ、二つ設立する動きがあることから、教育関係当局はこの民間の代案学校に対して支援する方向に変わった(金ジョング, 2006)^(註7)。そのため、学校に不適応する学生を対象にする学校だけではなく、生態的な生き方や仁性教育を追及する代案学校まで特性化学校の政策の範囲に入ることになった。出発の根っこも異なることと、追求する価値も多く違い、その対象も多く異なる霊山聖地学校とガンジー学校は特性化学校という同じ範疇に縛られるようになった。また、中途脱落の問題の解決案の一つとして考えた公立代案学校の計画は、その以降「委託型代案学校」として登場するようになる。

一つ興味深い点は、最初は「代案学校」という名称を使おうとしたが、政策が法制化する過程で「特性化学校」という名前に変えた点である。「代案学校」という名称を使用することは、公教育を行う主体である教育部としては苦しい部分があったと思われる。そもそも「特性化学校」という名前はアメリカのマグネット・スクール(Magnet School)^(註2)を翻訳したことばであって、教育部の学校多様化政策のなかの一つとして企画されたものである。すなわち、既存の商業高等学校や工業高等学校を教育部は企画しており、ちょうど法制化するところであった。従って、「特性化学校」の法制化は当時の韓国教育の難題とビジョンを一掃する孫悟空の如意棒のような存在になったと金氏(2006年)は述べている。

1998年3月、6つの学校が特性化高等学校として認可を受け、その翌年には4つの学校が追加され、2002年には聖地ソンハク中学校が開校されることで、特性化中学校も誕生した。2006年12月現在、全国に27か所の特性化高等学校が存在している⁽¹⁾。

5) その後の代案学校⁽¹⁾

(1) 都市型代案学校の誕生

1999年、ソウル永登浦に「ソウル市青少年職業体験センター」という公式名称でオープンした「Hajaセンター」⁽²⁾はこれまでの代案教育運動とはもう一つ違った一線を引くことになった。Hajaセンターは、「脱学校児のための道しるべの如き学校の外の学習空間」である。

Hajaセンターは、学校から飛び出した子どもたちが、自分が本当に勉強したいと思っていることだけを思い切り学べる職業の空間であり、良い先輩や先生である職業人を直接に会える空間でもある。既成社会が決め付けた関係を身につける空間ではなく、新しい関係を設定し、学校を飛び出した子どもの参加が多く、持続的にセンターを訪れる子どもが増えることで、最小限の制

度的な装置が必要になる。そのため、2001年9月に「Haja 職業場学校」をつくる。都市の多様なネットワークを活用して新しい人文学を勉強し、インターンシップやプロジェクトを通して自己成長ができる学校である。名前は学校であるが、一般の公教育に比べると非常に破格的だといえる。韓国で国語、英語、数学のような教科を中心に正規の教育課程を組んでない最初の学校である⁽³⁾。

このような Haja 職業場学校の実験は、以降、他の代案学校での行われた破格的な取組みに少なくないとも多くの影響を与えている。入学後、1年の間は授業をせず、旅行をしたりするガンジー自由学校(2002)と、決まった授業はなく、ひたすら自己主導的な学習だけを行う中学校課程のガンジー村学校(2005)が誕生するのに多くの刺激を与えた。

2001年4月に「ソウル市代案教育センター」ができ、Haja 職業場学校のような都市のなかにある小規模の代案学校を行政、財政、プログラムの側面から支援する機関である。

教育の新たなキーワードである「ネットワーク」ということばを積極的に実践するそのような教育支援機関ができています。

2006年現在、ソウル市代案教育センターとネットワークを組んだ都市型代案学校は総16ヶ所である。この学校は都市型代案学校という共通点以外には、また、今の時代の主要な価値である「生態的な暮らし」「ともに生きる暮らし」「自分の人生の主人公になること」のような共有点を有しており、これ以外には多く異なる⁽³⁾。精神的な苦労を経験した子どもを対象にする治癒学校、地域社会に根を下ろした村学校、基本的な衣食住を解決していない子どものためのグループ・ホーム学校、自分のなかにある熱気と芸術的な才能を思い切り発散することに焦点を置く創意的な学校、新しい生活場を求め、脱北した子どもの社会統合と自ら主体的になるために支援が行う学校など、非常に多様である。

しかし、このすべての学校の違いを認め合い、ともに共有できる資源から一つずつネットワーキングしつつある。言い換えれば、「小さな学校の大きな絵」^(註3)である。

上記した内容以外にもソウル市代案教育センターの意味は、何よりも自治体の教育福祉のモデルであるということである。すなわち、教育自治と地方自治が分離されている今の構造のなかで教育関係当局だけではなく、自治体が代案教育事業をやり始めた初のモデルである。市民の力で築き上げてきた代案的な学習空間を自治体が支援するという形のこのモデルは、すでに他の都市においてもベンチマーキングが始められている。ソウル市代案教育センターのモデルは、とくに韓国の代案教育の未来のために重要なメッセージを投げかけており、それは韓国の代案教育がこれ以上、学校を立てることに没頭するのではなく、既存の多様な学習空間や資源、またプログラムを結び、それをグレードアップするよう運動の方向を転換しなければならないというのを示唆しているといえよう。

(2) 小学校代案学校の登場

これまで代案教育の萌芽期をみてきたが、放課後学校、週末学校、季節学校のようなプログラムは主に小学生を対象にしている。しかし、実際に全日制の小学校代案学校ができたのは2001年になってからである。それは中等代案学校に比べ、小学校代案学校がその至急性が薄かったのが主な理由のなかの一つである。小学校は少なくとも中・高等学校に比べ、暴力性や受験の重圧感から相対的に自由であるからであろう。小学校代案学校の誕生が遅かったもう一つの理由は小学校が義務教育であるという点である。

ところが、時代のながれを逆らうことができず、中等代案学校の実験が社会的に広がりを見せ

た。紆余曲折で誕生した小学校代案学校の出現は韓国社会への問題提起として、義務教育に対する問い掛けである。義務教育は近代の公教育が出現することで登場し、2001年5月に慶南の山清のガンジー中学校の解散命令と告発事件からでも分かるように、義務教育は国家がつくった学校に義務的に就学するという意味である。

小学校代案学校に子どもを通わせる親は義務の就学猶予の申請をするか、あるいは小学校に長期欠席者として処理してもらって定員外に管理され、検定試験を受ける資格になる方法を選択する。このような不便さを甘受しても子どもを小学校代案学校に行かせる親は徐々に増えている⁶⁾。また、小学校代案学校の数も増加していることから考えても、教育権が国家から親へ、あるいは学生に徐々に移っており、公教育の「公」の意味も「国家」から「市民」に移っている過渡期であることが分かる。

(3) 委託型代案学校という制度

1998年、特性化学校の政策以降、教育関係当局の代案教育に関する政策の一つである「委託型代案学校」制度が2001年にできた。論理的に考えてみると、委託型代案学校は代案学校に関する制度をつくる際、もっとも早い内に出てくるはずの制度であるにも関わらず、上記したように民間が設立した代案学校が一気に設立されることで、特性化学校の制度が中途脱落の危機のある青少年のための対策になった。

委託型代案学校は学校が合わず、中途脱落の可能性のある学生を対象にした正規学校ではない委託型の教育機関に行き学習を受けでも出席として認められる制度である。

いわば、元の学校に所属しており、その学校に学籍はあるため、委託型代案学校の教育課程を受け、終了すると元の所属している学校から卒業証がもらえる制度で、市・道教育庁で運営している。学校概念よりは代案教育の支援体制の一つである。

しかし、委託型代案学校として指定された機関は基本的に代案教育と脈を一緒にしている機関であるということが重要である。すなわち、民間が築き上げてきた学校の外の多様な学びの場がなかったとすれば、委託型代案学校という制度は創造さえできなかったことであろう。もし、可能であったとしても、限定されたプログラムにとどまったと思われる。

初期の委託型の指定学校であった青良情報高校、韓林実業高校のように学歴認定の生涯教育施設であったり、教師の資質の問題だけではなく施設も劣悪な状態であったため、多くの問題があった。そのなかで、学校の外に青少年のための教育プログラムの運営や方法を持っている修練館や福祉館などが委託型学校として指定を受け、その本来の趣旨を生かせるようになった。とくに、委託型学校の質の管理と体系的な支援のため、ソウルは代案教育総合センターが、釜山は釜山代案教育支援センターが誕生した。促進してくれるなどの拠点的な機能の重要性について改めて感ずる部分であり、この部分は市道教育庁の役割が管理・監督のような官僚的な機能から子どもの多様な学習要求を支援する役割へと変わらなければならないことを示唆する事例であると積極的に解釈する必要があると金ジョング氏（ソウル市代案教育センター）は強調している。

6) 代案教育法⁶⁾ができた

2003年6月、教育人的資源部は「代案教育の拡大・充実化に関する方案」を発表した。この方案は、学校教育に適應するのに困難を抱えたり、自己素質を開発するため、特別な教育を希望する学生に学びの機会を増やせることを主に出している。この方案のなかには代案学校の拡大のために体育場、学校の建物などの施設基準を大幅に緩和しており、施設の賃貸まで許容し、教育課

程や教員採用などに幅広く特例が与えられる各種学校の形態の「学歴認定の代案学校」の設立を推進するという内容が含まれている点である。

2003年9月に学歴認定などを規定する施行令を市道教育庁の条例として定めようとしたが、学歴認定に関する基準が地域によって異なることによって混乱が予測され、2004年6月頃に大統領令で規定することを決めた。

2003年8月16日と9月15日に「小中等教育法」の改定法律案の立法が予告され、ようやく国務会議を経て2005年3月2日に国会で「代案学校法」が採択された。

「小中等教育法」の第60条の各種学校に関する規定に代案学校の条項を追加することで小中等教育法第60条3を新設している。

7) まとめ

韓国の大学受験教育偏重で、「塾」などの「私教育」も日本以上で、約12年前、入学試験に付属した既存の教育に疑問を呈して代案教育運動が広がり、当時の学校は「第1期の代案学校」と呼ばれ、公教育のセーフティネットとして位置づけられ、小規模で都会から離れ、自然豊かな場所につくられ、寄宿生活を伴う私熟的要素が強かった。6年間の隔離生活になり、社会生活への復帰の課題や教師の情熱で成り立っているために、途中で挫折するケースが多かった、これを韓国では「地面に頭突きする」と批判された。

この第1期代案学校の弱点を十分認識して、公教育の補完ではなく、公教育の改革モデルとして、公教育に影響を与える「地域の学校」を目指して、以友代案学校のように第2期代案学校が設立されている。政府が公認しているにも関わらず、財政的な支援がなく授業料は他の学校と比べると高いが、公教育の熟通いを考えると高くない。

全入教育（入試優先でなく、青少年の時期に合った教育）が受験偏重の公教育へ挑戦が見られる。既存の公教育の欠落した個別化・個性教育への教育改革が日韓の代案教育現場で推進されている⁽⁸⁾⁽¹⁰⁾。

IV. 日本の代案学校との交流

1) きのくに子ども学園^(註4)との教育交流

日本で一番、楽しい学校であると言われている「きのくに子ども学園」は「Neill 研究会」の会員たちが Summer hill の精神と John Dewey の思想から学び、それを日本の実情に合わせてつくった小さな学校である。「自由な子ども」の養成を目標として自己決定、個性化、体験学習が基本方針であるこの学校は、問題の多い今日の教育を改善するためのモデル学校として国内・外から注目されている。韓国の代案教育との多くの共通点がみられ、最近では、多くの韓国の教育者が見学に来日し、韓国に紹介され、相互交流が続いている。

2) きのくにが韓国に紹介された経緯

1992年7月、当時「韓国 Neill 研究会」会長と「韓国ヨルリン教育研究会」の副会長であった金恩山が日本の「個性化教育」研修会に参加するため来日して以来、1993年12月に同氏は日本の神戸大学であった国際シンポジウムに参加し、韓国人としては初めて「きのくに学園」を訪問した。1995年6月には「韓国 Neill 研究会」の会員25人が韓国の団体としては初めて、この学園を

訪問している。また、11月にはこの会のなかで金ソンヤン教授が「外国の自律学校—日本のきのくに子ども村学園」という研究発表を行っている。さらに、訪問報告書を会誌の『自律教育第4号』（1995年11月）に掲載された。

2000年10月13日には韓国教育学会の年次大会（嶺南大）で金恩山は「日本の教育改革のモデル学校である「きのくに子ども村学園」という研究発表を行っている。

2003年は総5人が、2004年は韓国中央放送のテレビの取材陣の5人と16人の幼稚園園長など、総36人が、2005年は韓国小等学級経営研究会の会員44人が、ムジゲ（虹の意味）小学校の教師と学生10人など、総57人が、2006年は韓国学校発明協会の会員40人が、韓国プロジェクト研究所所属の幼稚園園長などの47人、聖地ソンハク中学校の教師と学生24人、大邱教育大の大学教授と大学院生の18人、地平線中学校の教師12人など、総166人が「きのくに」を訪れた。2007年には1月、2月だけでも41人が訪問し、増加し続けている^{註4)}。

3) きのくに子ども村学園の韓国代案学校訪問

1996年の秋は1995年「韓国 Neill 研究会」のきのくに学園の見学団に同行した「ムルコ」代表のオク・ヨンキョンさんが中心となり、忠南の嶺東で「自由学校を準備する集い」の行事があった。その場に「きのくに学園」の堀校長をはじめ、教師3人と学生4人が招待され、参加した。2000年5月にはきのくに国際専修学校の1期生の7人と教師2人が「戦争と平和」というテーマの体験学習のため、4泊5日の日程で韓国を訪れた。弘益大学の附属女子高校を訪問している。2002年5月には、きのくにに高等専修学校の3期生の11人と教師2人の計13人が韓国を訪れる。今回も弘益大学の附属女子高校を訪問し、一緒に踊ったりしながら、交流の時間を過ごし、ホームステイをしている^{註4)}。

2002年11月には韓国自律教育学会主催の学術大会に堀校長が招待され、「日本の代案学校(Alternative School in Japan)」という発表を行っている。それ以降も日本の「きのくに」関係者が韓国の代案学校を訪問して意見交換をしながら交流を深めている。

4) きのかくとガンジー学校の共通点

「韓国の Summer hill」と言われるガンジー学校は、韓国にあるどの学校より、「きのくに」と共通点が多い学校である。金恩山（前弘益大教授）は両学校の共通している点を次のように指摘している。両学校が Summer hill 学校をモデルにし、John Dewey の思想を取り入れたということ、それぞれの自分の実情に合うように調整してきたことが共通点だといえる。すなわち、両学校は基本理念を「幸福」に置き、幸せは健康、愛、自由、知恵であると言われている。従って、きのくにやガンジー学校は上級学校への進学を目標として教育を行っていない。そのため、一般の学校での試験、宿題、通知表などが無い。その他にも、山の奥にある小さな学校であること、プロジェクト学習を多く行っていること、衣食住の基本教育を重視（パンづくり、服づくりなど）すること、自然に親和的で体験を重視する教育、海外移動の授業が多いこと、教師と学生との親密感のある人間関係、多くの会議を通した活発な自治的な生活運営、多様な部活などを挙げることができる。

一方、両学校の設立者が以前は大学で研究をしていたが、そこから教育現場に入ってきたという共通点がある。また、ニュースレターや本を通して自分たちの活動や教育思想について世のなかに発信している。全体的にみて、韓国では「きのくに学園」のプロジェクト学習と自治活動など

に多くの関心を持っている。また、地域社会との協力や体験を通じた多様な特別活動なども非常に参考にして親密な交流が代案学校の質の向上に益々拍車が期待されるところである。

5) 東京シューレ^{註5)}とミンドォレ (タンポポ) サランバン^{註6)}との交流

ミンドォレ雑誌通巻4号、6号、9号、11号、22号などに続けてシューレに関する文章が載せられ、シューレの韓国訪問の度、自然に出会いの数が増えた。そのような縁で、サランバンとしては東京シューレとシューレ大学と出会う機会が相対的に多くなった。

2000年3月17日東京シューレの韓国訪問中にミンドォレ出版社で脱学校集いの友達 (チングドォル)、出版関係者、homeschooler などの参加で懇談会がもたれている^{註6)}。

2000年3月18日にも同様に日韓不登校青少年討論会が Haja⁶⁾センターで開かれた様子が、ミンドォレ雑誌8号^{註6)}に詳細に掲載されている。その後、順次活発な交流が現在まで続いている。東京シューレは、学校の外にある子どもと青少年のための居場所であり、フリースクールである。6歳から21歳までが入会できる。シューレは「精神を自由にするとところ」という意味のギリシャ語である。

上記のことを通して子どもが主体とする社会をつくり、教育選択の機会の拡大と学歴社会の変革、子どもの権利の増進、子どもと大人が互いに信頼できる社会づくりを実現しようと努める。シューレ大学は東京シューレからできた一種の代案大学で、自発的な学びの課程を願う若者が選択する課程である。構成員は東京シューレ出身だけではなく、home schooler、一般学校の出身など、多様である。日本の代案学校としての「きのくに学園」や「東京シューレ」と韓国の学校との交流と影響は今後、より発展していくことが予測される。

V. お わ り に

代案教育は既存の学校教育がもつ全てに疑問を持ち、創造できるすべての教育を実験してみたいという意志で充満するとき、その意味がもっとも明確になるという事実を歴史は物語っている。学校教育が付与した教師と学生との関係を疑い、学級という独特な構造を疑い、そこで教える教科書と教育内容を疑い、更にその学校からもらう卒業証書を疑ったりしながら代案を模索した歴史を感じる。そして、「教師」と「学生」という言葉さえ、大胆に廃棄することによって新たな関係を模索する学びの場をつくり、一つの教室に子どもたちが押し詰め状態の一日中、その教室で授業を受ける構造を大胆に破り、大学生より自由に自己主導的な学習を選択できる学びの場もつくる成果を評価できる。

更に短い場合は1週間、長い場合は何か月をかけて旅に出る方式で新しい教育内容を組んだ学びの場もつくることのできた。試験や成績でない、長文の論文やインターシップの結果発表を通して卒業を認める学びの場も可能になっている。

しかし、いつの間にか既存の学校教育が行ってきたことを疑い、これまで創造さえできなかったことを大胆に実験してきた学びの場づくりのことより、少しずつ学校に近づけようとする代案教育の現場が増えている。「代案教育」という名前も「学校」という枠をもつ「代案学校」に限定して使われ始めている。公教育の問題点を改善しようとする「代案学校」がもつ順機能は否定できない。この代案学校が公教育を刺激する役割を継続的に行ってほしいものである。代案教育は単純に公教育の補完ではなく、補完の役割を果す必要性もない。

今は、代案教育は新たな生き方を企画し、新たな存在の様式が実験できる場であることについて自覚する運動がもっとも切実に求められる時期でもある⁹⁾¹⁰⁾。

筆者は不登校親の会やNPO 三重シューレの顧問として、1999年 IDEC（国際フリースクール世界大会）参加し、韓国の教育者の課題や取り組みを共有して以来、毎年、韓国視察や調査で出向き取り組んできた。筆者が著書や論文で日韓の教育改革は「能力主義と市場原理主義による教育システムの再編」として、この点では、以友代案学校等に導入された個別化・個性教育としての授業・学校改革を紹介した⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾。日韓の既存の教育制度に対して「もう1つの学校」としての代案教育は、個別化・個性教育を促進する教育改革に対する評価と公的な経済支援が必要・不可欠である。

註1)「家庭内引きこもり」は、日本でも深刻な問題となっているが、現在、韓国でも精神科医の呂寅仲（2002年）の実態調査では、徐々に増加の傾向がみられ、病院をベースにした取り組みが進められている。

註2) マグネット・スクール (Magnet School) とは、アメリカ合衆国発祥の公立学校の一種である。魅力的な特別カリキュラムを持つため、郡や市、学区あるいは周辺地域に至るまでの広範囲から、子供たちを磁石（マグネット）のように引き付ける学校という意味で命名された。

註3) 「小さな学校の大きな絵」金ジョングの表現（Seoul 市代案教育センター）

註4) 学校法人「きのくに子どもの村学園」（和歌山県橋本市彦谷51）機関誌，通信誌

註5) 学校法人「東京シューレ」（東京都北区岸町1-9-19）機関誌，通信誌

註6) ミンドォレ雑誌通巻4号～22号

註7) 金ジョング（ソウル市代案教育センター所員）

〈参 考 文 献〉

- (1) 韓国教育資源部教育白書，（1997～2007年）
- (2) 橋元慶男：『韓国の不登校に関する研究—日本の不登校との状態像の比較を通して—』大学図書出版，東京，2008.
- (3) 「Education in Korea 2006～2008」
- (4) 「Seoul alternative learning Community Network」report in Korea, 2006
- (5) 「School Non-Attendance in korea」2001, Tokyo shure
- (6) 『代案教育の10年』趙恵貞（ソウル市代案教育センター長，延世大教授）
- (7) 『オルタナティブな教育実践と行政の在り方に関する国際比較研究』国立教育政策研究所，東京，2003.
- (8) 橋元慶男：『韓国の不登校に関する研究—日本の不登校との状態像の比較を通して—』大学図書出版，東京，2008.
- (9) 橋元慶男：「A Trend of New School Reform in korea」アジア文化研究第14号，（p119～130）
- (10) 橋元慶男：「韓国の教師たちの授業・学校づくりに関する研究」アジア民族造形学会誌，第7号（p103～108）

